

# 験者のあくび

— 『枕草子』 「すさまじきもの」 段小考 —

松本昭彦

## 【要旨】

『枕草子』第二十三段「すさまじきもの」の段には、験力を持った祈祷僧が、物の氣を患った者の治療のため、憑り坐しに物の氣を移らせようとして加持するのだが、全く効果が表れず、あくびをして横になってしまふ、という「すさまじきもの」の一例がある。従来これは「加持に疲れ、何の効き目もないのに倦み飽きて眠くなってしまった験者（祈祷僧）の、やる気のなさを象徴する（あくび）」と解釈されてきたが、『古今著聞集』巻六・第二六六話、『栄花物語』巻二十九「たまのかざり」などによると、加持場面での病人のあくびは、物の氣が治る兆候として現れており、本段における清少納言の筆致なども考慮すると、験者への皮肉を込めて、「本来あくびが期待される病人ではなく、験者がしてしまう」という文脈に読むべきである。

## 一 問題の所在

『枕草子』第二十三段「すさまじきもの」の段に、次のような記事がある（章段番号・引用本文は小学館の新編日本古典文学全集により、私に句読点を打ち、漢字の当て方を変えたところがある。以下同）。

験者の物の氣調ずとて、いみじうしたり顔に独鉦や数珠など持たせ、

せみの声しほり出だしてよみぬたれど、いささか去りげもなく、護法もつかねば、あつまりる念じたるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまでよみ困じて、「さらにつかず。立ちね」とて、数珠取り返して、「あな、いと験なしや」とうち言ひて、額より上さまに、さくりあげ、欠伸おのれよりうちして、寄り臥しぬる。

験力を持った祈祷僧が、物の氣を患った者の治療のため、憑り坐しに物の氣を移らせようとして加持するのだが、全く効果が表れず、あくびをして横になってしまふ、という「すさまじきもの」の一例である。

高等学校の古典の教科書にも採られるなど有名な箇所だが、本稿では、ここに出てくる「あくび」の意味を考えてみたい。「考えてみたい」などと言っても、考えるまでもなく、加持に疲れ、何の効き目もないのに倦み飽きて眠くなってしまった験者（祈祷僧）の、やる気のなさを象徴する「あくび」として問題はない、ように見える。しかし、そのあくびを「おのれより」するとはどういうことであろうか。そもそも欠伸は「自分から」するものではないか。あるいは、第二百八十五段に「見ならひするもの欠伸、ちご」とあることからすると、他人から伝染したのではなく、一所懸命努めるはずの験者が自分から、ということであろうか。恐らく通説ではそのように解釈していると思われるが、後に述べるように、『枕草子』における「験者」のイメージや、「すさまじ」という言葉の語感からすると、もう少し積極的というか、強く皮肉な意味合いを込めた表現と考えるべきではないだろうか。

以下この見通しのもとに、「すさまじきもの」としての「験者のあくび」の意味を考察する。尚、この段について『校本枕冊子』によるに、問題にすべき異文はない。

## 二 験者への視線

ところで、本章段のテーマ「すさまじきもの」という言葉であるが、以下の辞書等にあるように、単に「興ざめでつまらない」というよりは、もう少し強い意味を持っているようである。例えば、『小学館古語大辞典』には「程度を逸脱し調和を損ねて共感が持てず、感興のわかない感じを表すのが基本」とあるし、『岩波古語辞典』は「③（期待の気持が冷えつくような事態に直面して）しらけた感じがする」、『時代別古語大辞典・室町時代篇』でも、「③対象の実態が意に反するものであって、心も冷えるばかりの感じである」と説明されている。また、本段に関する「新編日本古典文学全集」の頭注では、「すべて不調和感から生じる興ざめで不快な感じを言う。季節はずれ、期待はずれなど」とある。いずれも、「心が冷えつく」「不快」など、かなり強い否定的感情を表現するものとしている。

次に、「すさまじきもの」段の中の他のいくつかの例を見てみることにする。

女迎ふる男、まいていかならむ、待つ人ある所に、夜すこしふけて、しのびやかに門たたけば、胸すこしつぶれて、人出だして問はするに、あらぬよしなき者の名のりして来たるも、かへすがへすもすさまじといふはおろかなり。

この例では、単に「待つ人が来なくてつまらない」というのではなく、来た人と思つた待ち人が、実は取るに足らない別人であったというところの「期待はずれ」である。

かならず来べき人のもとに車をやりて待つに、来る音すれば、さななりと、人々出でて見るに、車宿りにさらに引き入れて、轆ほうとうちおろすを、「いかにぞ」と問へば、「今日は外へおはしますとて、わたりたまはず」などうち言ひて、牛のかざり引き出でていぬる。

の例も同様に、車の音がして、来る予定だった人が来たと思つたら、使いだけが帰ってきた、というように、期待が一度高まった上でのあやくな期待はずれである。また、

ちこの乳母の、ただあからさまにとて出でぬるほど、とかくなくさめて、「とく来」と言ひやりたるに、「今宵はえまるまじ」とて、返しおこせたるは、すさまじきのみならず、いとにくくわりなし。

の例でも、本来ちこの世話をしなくてはならないはずの乳母が出かけてしまつて世話をしてもらえない「期待はずれ」のみならず、「ただあからさまに」と言っておきながら帰って来ず、こちらから使いを遣つてはじめて返事をよこした点などを含めての、よりあやくな、皮肉な感じを含めての「期待はずれ」である。

人のもとにわざと清げに書いてやりつる文の返事、今はもて来ぬらむかし、あやしうおそきと、待つほどに、ありつる文、立て文をも結びたるをも、いときたなげに取りなし、ふくだめて、上に引きたりつる墨など消えて、「おはしまさざりけり」もしくは「御物忌とて取り入れず」と言ひて、持て帰りたる、いとわびしくすさまじ。

とあるのも同様に、手紙を遣つた相手の返事が得られなかっただけでなく、こちらが出した手紙まで汚れて再びは使えなくされてしまった腹立たしさを含めての期待はずれである。いずれの例も、単に一般的に本来の職務・そうあって当然の事態が果たされず期待はずれ、という以上に、より焦点化した期待はずれがあり、そのあやにくさに皮肉・不快な感じが伴う程の「興ざめさ」なのである。

とすれば、問題の「すさまじきもの」の験者の記事でも、験者が期待通りの験力を発揮せず、病気が治らないということ以上に、験者の態度・物言いが、腹立たしいほどのあやにくさを感じさせるものであるはずである。

ここで少し迂遠になるが、『枕草子』における験者への視線の性格を確認しておく。まず第二十六段「にくきもの」では、

にはかにわづらふ人のあるに、験者もとむるに、例ある所になくて、ほかにたづねありくほど、いと待ち遠に久しきに、からうじて待ちつけて、よろこびながら加持せさするに、このごろ物の気にあづかりて困じにけるにや、あるままにすなはちねぶり声なる、いとにくし。

とあって、「すさまじきもの」段と近い験者像が「にくきもの」の一例として描かれる。さらに、第五段には、

思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。……まいて、験者などは、いと苦しげなめり。困じてうちねぶれば、「ねぶりをのみして」などもどかる、いと所せく、いかにおぼゆるむ。これ昔の事なめり。今はいとやすげなり。

とあり、ここでも験者が加持の際に居眠りをして非難されることが見られる。「いと所せ」いのは昔であって、「今はいとやすげなり」なのは、そんな非難に対しても厚顔でいられるということであろう、第二百三十九段には「ないがしろなるもの……聖のふるまひ」とあり、「験者」と重なる部分が多い聖について、「ないがしろなるもの」という評価である。また、三巻本本来の部分ではないが、一本第三段「聞きにくきもの」段には、「聞きにくきもの……ねぶりにて陀羅尼よみたる」とあり、これもおそらく頼まれて加持祈祷をしているのに、眠り声で陀羅尼を読む験者に対する批判的視線がある。一方、第百五十一段の

苦しげなるもの……こはき物の気にあづかりたる験者。験だにい

ち早からばよかるべきを、さしもあらず、さすがに人笑はれならじと念ずる、いと苦しげなり。

のように、誠実な験者に対する同情的な視線もないことはないが、験者（特に加持の際の眠たげな）に対しては批判的でかなりきびしい、あるいは皮肉なと言っているような視線が向けられていると言えるだろう。

そこで、この「すさまじきもの」段の験者にも、かなり批判的、皮肉な視線が注がれていることを、細かい表現から確認しておきたい。

まず、「いみじうしたり顔に」という表現であるが、『枕草子』には第百七十八段に「したり顔なるもの」という章段がある。全文を引用してみる。

したり顔なるもの 正月一日に最初に鼻ひたる人。よろしき人はさしもなし。下臍よ。きしろふたびの藏人に、子なしたる人のけしき。また、除日にその年の一の国得たる人。よろこびなど言ひて、「いかしこうなり給へり」など言ふいらへに、「何かは。いとこと様にほろびて侍るなれば」など言ふも、いとしたり顔なり。

また、言ふ人多く、いどみたる中に、選りて婿になりたるも、我はと思ひぬべし。

受領したる人の宰相になりたるこそ、もとの君達のなりあがりたるよりも、したり顔に、けだかう、いみじうは思ひためれ。

当然いろいろな例が挙がるわけだが、気づくのは、清少納言から見ても身分のそれほどよろしくない、つまり教養の高くない階層にそんな態度をとる例を多く感じている点である。一つめの正月最初のくしゃみの例は端的に「よろしき人はさしもなし」とされるし、宰相つまり参議への昇進にしても、もともとそういう家柄の子弟ではなく、受領を経ての昇任者、いわゆる「受領階級」の成り上りについて特に「したり顔」を感じている。除目（春の地方官任命儀式）の際に一番の大国の守に就任する人の例も、その階層の人に対する意識が表れている。ある種の軽侮の意識を持つ対象に

対して、「したり顔」と感じる人が多いのである。

一方、清少納言は「したり顔なるもの」に向かつては、それをへこます時に快感を感じるようである。第二百五十八段「うれしきもの」段に、

我はなど思ひてしたり顔なる人謀り得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これが答はかならずせむと思ふらむと、常に心づかひせらるるもをかしきに、いとつれなく何とも思ひたらぬさまにて、たゆめ過ぐすもまたをかし。

とある。このことからすると、「したり顔」にも関わらず祈祷が効かず、あくびをする験者にはかなり批判的・皮肉な視線を向けていたと考えられよう。

また、その験者の声を「せみの声しほり出だして」と表現することも、この表現が『堤中納言物語』「虫めづる姫君」（引用本文は新日本古典文学大系）に

（姫君は）立ちどころ居どころ蝶のごとく、□（新編全集は「こゑ」）せみ声にの給ふ声の、いみじうをかしかければ、人々にげさりきて笑ひければ、しかしかと聞こゆ。

と、「虫めづる」だから、その振る舞いは蝶のようで、声は蟬のようだと皮肉る文脈で表れることからわかるように、かなり皮肉を込めた表現であろう。

さらに、「額より上ぎまに、さくりあげ」というのも、「物事が見込み通りに成果を挙げ得なかった時、その気まずさを胡魔化すテレ隠しの動作として、頭を撫で上げることは、頭髮の有無を問わず、人間無意識に取るポーズである」（『枕草子解環』一）のは確かだが、頭髮のない場合には、ユーモラスな、あるいは少し下品なしぐさに見えるのではないだろうか。

以上のことから、他の段の験者についてもそうであったが、この段の験者については特に、皮肉な、批判的な筆致で描こうとしている姿勢がうか

がわかるのである。そのことと、わざわざ欠伸を験者が「おのれよりうちして」と書くことを絡めて考えると、本来別の欠伸すべき人があるはずなのに、その人ではなく、験者が「自分から」した、ということの意味している可能性が出てくるのではないだろうか。

### 三 あくびの意味

本来のあくびすべき人、あるいは、あくびの意味について考える前に、験者の加持の方法を、先行研究により確認しておく。『枕草子』のこの段の記事などを使って、験者の物の氣治療の様態を考察したものに、小松和彦氏の『憑霊信仰論』がある。その中で氏は

私の想定する説は、次節以下で論証するように、「護法」は最初物怪（物の氣のこと。以下同・松本注）の憑いている病人に憑依するという考えである。田中（重太郎）説のように、「憑坐」に「護法」が憑依するとき「物怪」が病人から退散するのではなく、「護法」がすでに憑依している「物怪」を追い出す形で病人に憑依するのである。そこで、「護法もつかねば」は、「護法も病人に乗り移らないので」と訳さねばならないわけである。

とされ、さらに「調伏儀礼のプロセスは、次のようになっていことが明らかにになった」として、次のようにまとめられた。

- (A) ある人が病気になる。
- (B) 病気をなおすために、験者が招かれる。
- (C) 験者は経文・呪文を唱えて、「護法」を招き寄せる。
- (D) 「護法」を病人の体内に送り込む。つまり憑依させる。
- (E) この「護法」が病人の体内に入り込んで「物怪」と闘い、病人の体から「物怪」を駆り出す。

(F) 駆り出された「物怪」は、通常、「憑坐」の体に引き移される。  
 (G) 「憑坐」に駆り移された「物怪」は、験者の祈祷によって姿を現わし、いろいろと喋り出す。

(H) 「護法」が「憑坐」の体内に入り込み、「憑坐」に乗り移った「物怪」を、再び「憑坐」の体内から駆り出す。

(I) 「憑坐」から「物怪」が去ったとき、病人はなおる。

これによれば、問題の験者は、(C) 及び (D) を試みていることになる。なお、「一本」第二十三段には、物の氣治療場面の「憑り坐し童」の描写があり、清少納言たち女房階級の者は、主人のお産など、実際にそのような場面に立ち会った経験があったらうことが言える。

以上を踏まえて、験者のあくびの意味について考えることにする。そもそも「あくび」はどのような時に出るのかと言えば、眠くなった時に決まっているようなのだが、近世までは現代人には思いつかないもう一つの答えがある。つまり、神や霊、物の氣などがのり移った時にもあくびが出るのである。『近世の子ども歳時記——村のくらしと祭り——』宮田登・文(岩波書店)では、男の子が馬の上で「あくび」をしている絵に次のような文章が付けられている。

祭りの行列が出て、勘太は馬にのせられました。男の子なのに、化粧してお稚児さんになったんだそうです。途中眠くなったのか、大あくびをしたら、見ていた大人はみんなおよろこびしました。神様がのりうつった証拠なのだそうです。

これは近世の習俗を絵本に仕立てたものだが、これに類する「あくび」は、さらに時代を遡り、中古・中世にも広く見られる。いくつか、例を見て行こう。まずは、十三世紀半ばに成立した説話集『古今著聞集』から(引用本文は「新潮日本古典集成」による)。

侍従の大納言成通、雲林院にて鞠を蹴られけるに、雨俄かに降りたりければ、階隱の間に立ち入りて、階に尻をかけて、しばし晴れ間を待たれける程、

雨降れば軒の玉水つぶつぶといはばや物を心ゆくまで

といふ神歌を口ずさまれける程に、格子の中よりおしあげて、女房の声にて、「この程これに候ふ人の、物の氣をわづらひ候ふが、ただいまの御こゑをうけたまはりて、あくびて気色かはりて見え候ふに、いまずこし候ひなんや」と勧めければ、沓をぬぎて堂の中へ入りて、几帳の外にゐて、

いづれの仏の願よりも 千手のちかひぞたのもしき

かれたる草木もたちまちに 花さき実なると説きたれば

といふ句を、とり返しとり返しうたひて、また、

薬師の十二の誓願は 衆病悉除ぞたのもしき

一経其耳はさておきつ 皆令満足すぐれたり

これらをうたはれけるに、物の氣わたりて、やうやうの事どもいひてその病やみにけり。かならず法験ならねども、通ぜる人の芸には、霊病も恐れをなすにこそ。

〔卷六・第二六六話「侍従大納言成通、今様を以て物の氣の病を治する事」〕少し長い引用になったが、これで話の全部である。侍従大納言藤原成通は、多方面の才能を持つが、特に蹴鞠で有名な貴族である。その成通が、雲林院でわか雨のために蹴鞠を途中でやめて「神歌」を口ずさんだところ、「物の氣をわづら」っていた人が、その声を聞いて「あくびて気色かはりて見え候ふ」というわけである。看病の女房が成通にもっと歌ってほしいと言っているのであるから、「気色かはり」は、病気に少し良い徴候が見えたということだろう。とすれば、「あくび」は、さらにその前兆現象のほずである。

このあと、歌を所望された成通が、今度は今様を歌うと、「物の気わたりて、やうやうの事どもいひてその病やみにけり」となる。この「物の気わたりて」を、新潮日本古典集成は、「物の気があらわれて」と現代語訳しているが、「わたる」を、「(もともとそこに居たのが) 覚知できるようになった」と解釈したのだとすれば、それは少しずれるのではないだろうか。結果としては、物の気が「渡った」後、憑り坐しに変化が見え、そこに存在するのが覚知できるようになったのではあるが、本来は「(病人から) 憑り坐しに移って」と解釈すべきではないだろうか。例えば、『曾我物語』巻七(引用本文は岩波書店・日本古典文学大系)の、智興の弟子の證空が師の死病を引き受ける、いわゆる「泣不動説話」の中には、

晴明(證空を)おそしと、まぢし事なれば、七尺に床をかき、五色の幣をたてならべ、金錢散供、数の菓子をもりたて、證空を中にすへて、晴明、礼拝恭敬して、数珠はらはらとおしもみ、上は梵天帝釈、四大天王、下は堅牢地神、八大龍王まで勸請して、すでに祭文におよびければ、護法のわたると見えて、いろいろの金錢幣帛、あるひは空にまひあがりて、まひあそび、あるひは壇上ををどりまはる。絵像の大聖不動明王は、利剣をふり給ひければ、その時、晴明、座をたつて、数珠、證空の頭をなで、「平等大慧、一乗妙典」といひければ、すなはち、上人の苦惱さめて、證空にうつりけり。やがて、五体より汗をながし、五蘊をやぶり、骨髓をくだく事、いふにおよばず。是を見る人、晴明が奇特のたうとき、證空の心ざしの有がたさに、いろいろの袖しぼるばかりなり。

という記事がある。この中の「護法のわたる」は、冥界からこの場にやって来た、移動して来たこと(そしておそらく、病者の智興に憑依したこと)、を言うのであろう。護法はこの場面では、もともとそこに居たものが、視覚や聴覚で直接とらえられるように「表われ」たわけではない。金錢幣帛

が空中に舞うことによって間接的に示されるのは、いわば風圧を伴うかのように描写される、護法の(空間・次元の)移動・到着である。

また、『宇治拾遺物語』第五十三話(引用本文は岩波書店・新日本古典文学大系)の冒頭部分は

昔、物のけわづらひし所に、物のけわたし候程に、物のけ、物付につきていふやう、「おのれは、たゞりの物のけにても侍らず。……

で始まるが、これによれば、「物の気渡す」とは、やはり病人から物の気を「物付」(憑り坐し)に転移させることと読める。同様に、『富家語』第一二八段(引用本文は新日本古典文学大系)では

仰せて云はく、「大北政所は件の所に於いて御産あり。御物気渡されけるに、住吉明神の出でしめ給ひて、「恐れあるべからず。男子平産」の由を示し給けり。案のごとく、二条殿の誕生せしめ給ひし所なり」と仰せあり。

とあって、「物の気渡す」と加持とがほぼ同義の表現になっている。これも、先の小松氏のまとめによれば、物の気を憑り坐しに駆り移すことがイコールその治療になることから来ているのであろう。

つまり、憑り坐しへの駆り移しが、物の気を「渡す」行為なのである。とすれば、『著聞集』の「物の気わたりて」は、「物の気が憑り坐しに駆り移されて」という意味になる。そして、「やうやうの事どもいひて」は、物の気の「名乗り」や、恨みの言葉などを指す。やはり、物の気が憑り坐しに移って、名乗りをし、調伏される一連の治癒過程の前段階として、病人は「あくび」をしているのである。

次に、十三世紀初めの『発心集』巻二・第八話を見てみる。

(真浄房の霊が母に取り憑いて)とばかりのどかに物語りしつつ、あくび度々して例さまになりにければ……

この例でも、真浄房の霊が、（ここでは加持により調伏されるわけではなく、自発的に去るのだが）病人から離れて行き、憑依されていた者（ここでは母）が通常の状態にもどる前に「あくび度々して」いるのである。

先程の『近世の子ども歳時記 — 村のくらしと祭り —』では、あくびを「神様がのりうつった証拠」としていたが、中世の認識では、物の気が去っていく、あるいは「憑り坐し」に移る前兆として、憑依された者に「あくび」が起きると考えていたようである。

とすれば、「あくび」は、物の気による病気が治る際の第一段階の象徴ということになる。加持をする際は、完全な治癒の前に、まず病人の「あくび」が期待されることになろう。

次に、さらに時代を遡り、『栄花物語』を見てみよう。巻二十九「たまのかざり」（引用本文は小学館・新編日本古典文学全集）で、藤原道長の娘・妍子が物の気を患った際の記事には、

・妍子が）さばかり苦しげにおはしますに、（僧たちは）力を尽くし加持参るに、さらに御欠伸をだにせさせ給はず。

・夜、（妍子は）ともすれば消え入らせたまへば、僧たちも集まりて加持まゐれど、欠伸をだにせさせたまはず。

とある。あくびを「だに」と表現されている所に、「物の気が離れることがないのは言うまでもなく、その前兆のあくびさえも」しないという、こういう文脈での「あくび」の意味がよく出ており、それが期待されていたことがわかる。

因みに、このようなあくびは、病人本人のものではあるが、実は憑依したモノがしているというのが、当時の人の考えであったようである。

小式部内侍、この世ならずわづらひけり。∴和泉式部かたはらにそひて、額をおさへて泣きけるに、目をわづかに見あけて、母が顔を

つくづくと見て、息の下に、「いかにせむいくべき方もおもほえず親に先だつ道を知らねば」とわななきたる声にて候ひければ、天井の上にも、あくびさしてやあらむとおぼゆる声ありて、「あなあはれ」といひてけり。さて、身のあたたかさもさめて、よろしくなりにけり。

〔十訓抄・巻十・14〕

この話では、天井にいて「あくび」をした者が何者か示されておらず、これまでに挙げた例と少し異なるが、歌徳説話の型（パターン）からすると、何らかの原因で小式部に取り憑いていた神かモノか何か、小式部の和歌に愛でて去っていく——天井は通常の世界と異界との境界である——途中であくびをした、と解釈できるであろう。普通は、病人の体を離れる前にあくびをする（させる）のだが、この話では、体をすでに少し離れていたか、もともと文字通り「取り憑い」たのではなく多少「遠隔操作」ぎみに天井に居て小式部をその「気」に触れさせていたか不明ながら、異界に戻る直前に「あくび」交じりで和歌を愛でる言葉を残して行ったのである。

さて、では『枕草子』第二十三段「すさまじきもの」の例にもどらう。物の気の治療（加持）の場面での「あくび」とは、以上見てきたように、治癒の第一歩として、物の気が離れる前兆現象として、病人がすることが期待されるものであった。ところが、「すさまじきもの」段では、病人ならぬ験者本人がしてしまうのである。ここは、物の気治療場面における「あくび」の意味を前提として、そのパロディとして描かれていると考えられないだろうか。もちろん、この例の直後に、また別の「すさまじきもの」の例として

いみじうねぶたしと思ふに、いとしもおぼえぬ人の、おし起こしてせめて物言ふこそいみじうすさまじけれ。

とあることとの続き具合からしても、験者のあくびは加持に疲れ実際に眠くなつてのあくびと考えた方がいいだろう。前述のように同じ『枕草子』の第二十六段「にくきもの」には、

（験者は）このころ物の気にあづかりて困じにけるにや、ゐるままにすなはちねぶり声なる、いとにくし。

とあって、「験者が眠たくて……」という状況はよくあったようである。ただ、「本当なら一所懸命務めなくてはならない験者が、やる気なくあくびして寝っ転がってしまう」というだけでなく、「病人のあくびをこそ期待しているのに、それをさせるべく努めるはずの験者本人があくびして……」というニュアンスを籠めたものとして読んだ方が、この記事での験者に対する前述の皮肉な視線に見合う表現となるのではないだろうか。前述のように、本文に「あくびおのれよりうちして」とあるが、あくびを「自分から」するのは当たり前である。わざわざ「おのれより」という表現を入れているのは、「病人ではなく」という意識の表れであろう。

松本昭彦

実を言うと、もう一步踏み込んで、験者があくびをしたのは物の気を加持治療するはずの験者に物の気が憑依してしまったからだ、と読みたい気持ちがある。先に挙げた『近世の子ども歳時記——村のくらしと祭り——』が、あくびを「神様がのりうつつた証拠」としていたように読めるか否かが鍵だが、残念ながら今のところ集まっている中古・中世の例は、すべて先程見たように、物の気が「去る」時の徴候である。憑依された直後にあくびをしている例は見つかっていない。今後、このような例が出てきたら、この験者は、さらに「すさまじきもの」ということになるわけである。